

2024. 8. 2. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『わたしの今』

夏休みが12日間過ぎ、早くも8月に入りました。この間にも生徒達が様々な場面で活躍してくれました。

まずは高校ソフトテニス部のインターハイです。団体戦でも個人戦でもベスト8(5位)入賞です。ベスト8という結果は本校の選手にとっては少々物足りない気もしますが、一般的にはとても立派な結果です。特に個人戦でベスト8に入ったペアがいると、来年度の出場枠が8ペア確保できるので、後輩たちにも大きなプレゼントができました。



次に中学校のソフトテニスです。現在は府大会まで終わりました。全国大会出場と願わくはその優勝を目指す選手たちにとっては先が長いですが、市大会・府大会ともに団体戦優勝、個人戦ベスト4独占という結果をみれば、ここまでは順調だといってよいでしょう。近畿大会へは団体と個人の7ペアが出場し全国大会を目指します。

また中学校の陸上競技です。中学陸上では近畿大会の結果を待たずに全国大会への切符を獲得している選手たちがいます。100m・100mH・1500m・4×100mRです。全国大会での活躍を期待しつつもまずは近畿大会での活躍を望みます。近畿大会にはこれらの他に200mと走り幅跳び、円盤投げ、1年100mと800mの選手も出場します。近畿大会での2年連続総合優勝を目指して頑張ってください。

最後に華道部の生徒が出場した「花の甲子園」大会を紹介します。全国大会へとつながる近畿の予選大会です。3人一組で出場したその大会の今年のテーマが「わたしの今」だったそうです。顧問の先生から大会翌日に次のようなメールをもらいました。

近畿地区大会は「わたしの今」というテーマでした。高1の小寺さんは、過去から現在、未来の自分に見立てた花材を後ろから前に向かって順番に生ける方法で「過去があるから今の自分がある、今があるから未来がある」という思いを表現しました。高3の東野さんはアイデア自由花というジャンルを担当し、自分で自由に花器を設定できるため大中小の器で過去・現在・未来の自分を表しました。また、1種類だけ好きな花材を持ち込むことができるので、「今この瞬間を生きる」という花言葉を持つオレンジのバラを使いました。銀色の丸い枠は自分の限界を表し、枝を突き抜けさせることで今の自分を越えるという意味も込めました。クレシさんは、ひまわりとその後ろの葉で未来への希望の強さを、赤い実で今の努力が実を結ぶことへの期待を、黄色のふわっとした花で未来への不安を表しました。それぞれの思いが作品にもプレゼンにもあふれていました。予想していた花材がないものもありましたが、アドバイスしあいながら協力してできていたので、充実した大会になったのではないかと思います。

「今この瞬間を生きる」とは、昨年度の夏休み明けに全校集会で生徒たちに向けて強く語った内容です。それを意識してくれていたのなら嬉しいです。あと3週間の夏休み、生徒たちがどのように「今」という瞬間を生きるのか、楽しみでなりません。それぞれの夢に向かって精一杯楽しんで、精一杯成長してほしいと思います。

2024. 7. 26. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『攻撃的なねばり』

19日、1学期の終業式を終えました。今年の終業式も生徒たちを中心に据えたものにしてきたと思っています。今回も私が話し終えた後、数人の生徒が壇上に上がって感想や決意を述べてくれました。なかには毎回のように登壇してくる生徒もいるのですが、回を経るごとにその発言内容が確実に高まっているのが分かります。

さて、終業式の前後から部活動の夏の大会が始まっています。生徒の頑張っている姿を見るのは楽しく、日程を調整してできるだけ多くの試合の応援に行くようにしてきました。今回は、中学校と高等学校のソフトテニスの試合を観戦して思ったことを綴ります。

近畿大会の準決勝以上のレベルともなると技術的な差は実はあまりありません。ちょっとしたミスでながれを掴んだり手放してしまったりするものです。そのミスというのも、ほんの数センチ単位のもので、初心者やその競技に携わっていない人には分からない程度のものかもしれません。具体的に言うと、数センチ単位のロブの高さやストロークのコースや長さのことです。その狂いによって相手に攻撃を許したり得点を許したりして窮地に陥ってしまいます。そこで、選手たちはボールを打つ際には細心の注意を払って配球したり強打したりを繰り返します。そうして観戦していると、試合が決勝戦に近くなるほど息が詰まりそうです。

ところで、あらゆる競技をする上で「ねばる」という言葉があります。この言葉から連想するのは往々にして「防御」かもしれません。しかし、先日から選手たちのプレーする姿を見ながら『そうじゃないな!』と思いました。数センチ単位のミスもないよう細心の注意を払いながらも攻撃し続ける「ねばり」です。このすさまじく忍耐力（精神力）と体力を要する「ねばり」こそが「攻撃的なねばり」で、厳しい勝負をものにする上でその必要性を強く感じました。

この「攻撃的なねばり」はスポーツ以外、例えば勉強にも言えるのではないのでしょうか。勉強は最終的には自分一人でするものだと思います。勉強のやり方や教材、きっかけなどは先生から教わるのかもしれませんが、でも、いつまでも言われたことだけをやっていては本当の実力はつきません。自分に合った勉強の仕方を見つけ、自分で設定した目標に向けてコツコツとねばり強く取り組む以外に力をつける方法はないのです。将に「攻撃的なねばり」です。この機会に身の周りにはあるはずの「攻撃的なねばり」を見つけ、それに対する自分の取り組み方を見つめ直してほしいと思います。



2024. 7. 17. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夏休みを前に』

今週末（19日）をもって1学期が終わります。こうして振り返ってみると「アッという間」だったなあと思います。そして、夏休みになると部活動をはじめとして様々な行事があります。また、多くの部の場合は今夏をもって3年生が引退をすることになると思います。これまで一緒にやってきた先輩との最後の場面だからこそ、夏の試合やコンクールには思いが込められます。

先日、一足早く和太鼓部が定期演奏会の中で卒部式を行いました。一人ひとりの3年生に向けて後輩からメッセージと花束が贈られました。先輩との思い出が熱いものとなってこみあげてくるのでしょうか、嗚咽しながらメッセージを贈る人が何人もいました。卒部する3年生の方も、キャプテンが後輩や保護者、先生方へメッセージを贈ります。感謝の言葉を中心に後輩へは激励と「しっかり後を継いでほしい」という願いが伝えられました。「授業が終わるとできるだけ早く光風館のエレベーター前に集まって部活動の準備をしたこと、もうそんな毎日がないのかと思うと寂しい。」と語った言葉が特に強く印象に残っています。

夏休みを前にして、このほかにも2つのビッグニュースが飛び込んできました。

中学3年生がマレーシアのカンパーで行われたアジアトライアスロンジュニアカップ（2024/カンパー）で見事に優勝を果たしてアジアチャンピオンになりました。

“U15女子の部”に出場した彼女はスイムー375m、バイクー10km、ランー1.25kmを36分53秒で、2位の選手に1分近い差をつけてゴールインしました。最も過酷で鉄人レースといわれる種目です。いずれオリンピックに出場してほしいと思います。また、高校ソフトテニス部が、団体戦で近畿大会優勝を果たしました。昔から「近畿を制する者は全国を制する」と言われるくらいに近畿のレベルは高く、優勝は難しいのです。実際に、京都府の高校（これも本校だと思えます）が優勝したのは20年くらい前だと思います。決勝戦は、個人戦でも決勝戦を戦った大阪府の昇陽高校でした。個人戦で優勝したペアには本校のペアが4つもやられただけに何としても勝ちたかったはずです。決勝戦は2-0で勝利し、見事に個人戦の借りを返しました。

さて、生徒の皆さんは今年の夏休みにどんなドラマを見せてくれるのでしょうか。

部活動だけを取り上げるつもりはありません。夏休みの時期にこそ勉強に力を注ぐ人もいます。一人ひとりが自分の目指す目標に向けて精一杯取り組んでください。結果がどうであれ、その姿は美しく、皆さんを大きく成長させてくれます。



2024. 7. 12. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『中学・高校という時期』

今週は雨の日が多いです。期末テストが終わって1学期も残りわずか、夏期選手権大会に向けて部活動の練習に力を入れたいところですがこの天候ではそうもいきません。選手の皆さんはイライラした気持ちでいるのかもしれませんが。でも、この状況は対戦相手も同じ。その中でどれだけのことができるのか、そこが問われることになりそうです。

さて、今日は中学校教育と高等学校教育、つまり「中等教育」の時期とその意味について、私が普段考えていることを述べたいと思います。

一般的に教育は、大きく次の4つ、「就学前教育」・「初等教育」・「中等教育」・「高等教育」に分けられます。就学前教育は幼稚園教育をはじめとする小学校入学前の教育のことで、初等教育は小学校6年間の教育、そして高等教育は大学・大学院教育のことです。多くの人が大学進学をするという昨今の状況から「高等教育」という言い方に若干の“違和感”がなくはありませんが、この言葉が終戦後間もない頃の教育改革の際に確立されたことを思えば納得させられもします。当時は大学に進学をして学問を究めようとする人の割合は極めて低く、一般には“エリート”だと考えられていたであろうからです。ところで「中等教育」ですが、それは「前期中等教育」と「後期中等教育」とに分けられます。前期が中学校教育で、後期のそれが高等学校教育であることはわざわざここに書くまでもないことかもしれません。

そもそも小学校から中学校、そして高等学校まで教育は繋がっており、内容は徐々に高度になっていくものの、実は同じようなことを繰り返し学習します。それが顕著に表れるのが中学校と高等学校との関係です。高校生のみなさんの中には、『この勉強、中学校の時にやったやん！』と思ったことがある人がきつということでしょう。

今日の本題です。中等教育までと高等教育との一番の違いは学習（学び方を含む）の自由度だと思います。小学校・中学・高校へと進級していく過程でもこのことを経験しているはずですが、大学へ行くと高校までとは大きく異なり授業科目まで自分で選ぶことになります。時間割が人によって異なったりもします。それまでのように担任の先生から「いついつまでに〇〇のことをするように！」などと言われることもなくなります。別の言い方をすると、先生の指示を受けて行動するのは高校時代が最後だということになります。大学生に成ったら、「勉強しなさい」ということは先生からも親からも一気に言われなくなるものです。一方で、中学生高校生の頃は大学合格という目標に向けて、生涯で最も勉強する時期でもあるからこそ主体的に学習し、何事も自分で決めて行動する“大人”になる準備の最終段階の時期だともいえるのです。

中高の6年間、特に高校の3年間なんて100歳時代と言われる生涯からすればあっという間です。でも、この時期のことは一生思い出に残るものでもあります。期末テストが終わってホッとしているとき、今という時期について考えてみてください。



2024. 7. 2. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『人権学習を振り返って』

7月に入りました。生徒たちは期末テストに向けて頑張っています。また夏休みがすぐ先に迫ってしまいます。そして、夏休みになれば部活動の試合やコンクール、発表会が目白押しで開催されます。忙しい時期になってきました。

さて、今年は梅雨入りが遅かった分、7月に入ってから鬱陶しい雨降りの毎日が続いています。そんな中、6月29日（土）に人権学習を行いました。今年度も1時間目は全校集会の形式で私が話をし、2時間目に学級ごとで担任がその内容をより深めるという形をとりました。

今年度の1時間目は以下の通りに進行了しました。

- ①「知る」：人権について基本的なことを知る。差別とはどのような状態のことか。差別の反対語は何か。我が国に残る様々な差別。などについて。
- ②「考える」：読み物教材を使って、私が発した問いに対する答を全校生徒が考える。
- ③「感じる」：動画を観て心を動かし、私がその動画を見せた理由を考える。
- ④「表現する」：自分の思いや考え、感想や意見、決意などを皆の前で述べる。

①では差別の反対語が強く印象に残ったようです。また、我が国に残る様々な差別の中では、障害のある人に対する差別についてが考えやすかったようです。②では様々な考えが出されました。一人で学んでいては気づけない考えに触れることで自分の考えが深められたり広げられたりしたはずです。③の動画には力があつたようで多くの生徒の心に深く響いたようです。各学級で私がその動画を見せた意味について話し合ってもらいました。多くは「人を目に見える部分だけで判断してはいけない。」という答えが返ってきたようです。実は「しんどいことがあったら先生を頼って話してくれていいんだよ。」というもう一つメッセージがありました。④では舞台上上がってきた人たちが自分の経験をもとに感じたことや日頃から思っていることを語ってくれました。また、学級での話し合いで涙しながら自分の体験を語ったり、翌週の宗教の時間の感話の中で人権学習で感じたことを話している人がいたことは嬉しい驚きでした。

この学習を通して皆さんに伝えたかったポイントをここに書き留めておきたいと思います。それは、「人権学習を特別な学習、難しい学習だと捉えないでほしい」ということです。あなたの前に困っている人や泣いている人がいたらどうしますか。黙って行き過ぎるのですか。「どうしたの？」と声を掛けますか。「私にできることはありますか？」と尋ねますか。マザー・テレサの言葉を思い出しましょう。「愛の反対は、苦しみではなくて無関心です。」愛ある言動、愛のある生き方をしてほしいと思います。



2024. 6. 27. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『誇り（プライド）』

「誇りを持て！」これまで何度そう口にしてきたことでしょうか。生徒に対して、我が子に対して、同僚や後輩の教職員に対して、そして教師を目指す若者に対して。

振り返ってみると、この言葉は人を励ます際に使ってきたように思います。そう、自分では見失いかけているその人のよさや教師という職業のすばらしさを語りながら発してきました。意気消沈している人に対して多く使ってきましたが、よく考えると確たる実績がないとなかなか誇りはもてないものです。

22日・23日と、京都市中学校選手権総合体育大会陸上競技の部が行われました。1・3年の部の100m、200m、100mH（大会新記録）、800m、1500m、走り幅跳び、4×100mR（共通の部）、4×100mR（低学年の部）で優勝したほか、1年800mと円盤投げでの2位や1年100mでの3位入賞など、多くの種目で大活躍を果たし競技場で圧倒的な強さをみせました。因みに、全15種目のうち3位までに入れなかったのは走り高跳びと砲丸投げ、四種競技の3種目だけでした。団体総合成績は総得点104点で、2位の28点に大差をつけての優勝でした。私のそばでレースを観ておられた方が、うちの生徒の走りを見て「あの子だけ別次元の速さやな！」と驚き交じりの感想を漏らされたのを耳にもしました。

翌朝、初めて公式戦に出場した1年生で入賞が叶わなかった生徒に次のように声を掛けました。「先輩の姿、カッコよかったやろ。君もあんな風に成れたらいいなって思ったんやないか！？」その生徒は目をキラキラさせながら「ハイ！」と答えました。

中学校の陸上競技場では、「京都光華」のロゴの入ったシャツやユニフォームを着て歩いているだけで「誇り」をもてるのではないかと思います。これまで何度も全国大会へ出場しているソフトテニス部や箏曲部、和太鼓部や茶道部、軽音楽部の人たちも、きっと同じような気持ちになったことがあると思います。

その日の記事をHPにアップし終わって帰ろうとしたとき、グラウンドで中学陸上部のミーティングが行われていて足を止めました。一人ひとりがその日の感想を述べています。「〇〇（競技）に出させて顶きました。優勝はできましたが目標だったタイムには届かなかったの、これからももっと努力を続けたいと思います。応援有難うございました。」口々にそんなことを語っていました。素晴らしい成績を収めて、喜びと満足感是十分に感じているはずですが、謙虚な気持ちを忘れずそれを言葉にしています。指導されているのでしょうか、中学生でなかなか言えるものではありません。感謝の気持ちと謙虚さを忘れずに獲得した賞に自信をもつとき、本物の『誇り（プライド）』が沁み出るのだと思います。競技の姿もミーティングの姿もとても素敵でした。



2024. 6. 20. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『教育実習生の研究授業から』

教育実習が3週目に入り、今週は月曜日から次々と実習生による研究授業が行われています。先週末から彼女らが出来上がった学習指導案をもって校長室にやってきています。「お時間があれば観にいらしてください。」そう言って。

教師になって40年が経過します。学生時代にはもちろん自分が教育実習を経験しました。教師になってすぐの頃、「自分の勉強にもなるから」と先輩の先生からそう言われて教育実習生の指導を行いました。それから退職するまでの間に一体何人の教育実習生に出会ってきたことでしょうか。毎年5～6人と出会う訳で、それが40年ということは優に200人以上の教師の卵と接してきたことになります。

さて、まずは学習指導案の内容についてコメントします。最近の学生はかつての学生に比べると圧倒的に学習指導案を書くのが上手になりました。現職の先生が書くものよりもよくできていると感心させられる指導案も少なくありません。パソコンを使って作成ができることで体裁よく見えるのもその要因かもしれません。(当初は当然のことながら手書きでした。)しかし、一番の違いは所属する大学で事前指導が徹底して行われているからだだと思います。実際、2年前まで私がそれをしていました。

次に、指導方法をはじめとする学習内容の工夫です。具体的に言うと、学習の展開部分にほぼ必ず「グループ学習(話し合い活動)」が入れられています。学習指導要領のなかに謳われている「主体的・対話的で、深い学び」を実現する方法として手軽で分かりやすいからでしょう。30年以上前の、“自分の机に座っていれば上出来”という生徒たちが多い中でだったらできない活動だったかもしれません。生徒が興味をもつだろう教材(ネタ)を探し、楽しいと思える活動を考えることが最重要課題だった時代は変化し、授業のあり方も確実に変わったということでしょうか。

教育実習生の授業を観ていると、私も授業がやりたくなります。『この授業を私がやるとしたら…』参観しながら常にそんなことを考えています。授業後に実習生たちが授業の振り返りを訊きにきますが、一通りの講評をした後には必ず“私なりの料理の仕方”を話すようにしています。

教育実習生の授業の後、参観をした先生方はどうしているのでしょうか。もちろん私のところへフィードバックを求めに来ているわけですからそれぞれに先生方のところへも行っているはずですが、それならば、まとまって研究協議の場を設けられないのかと思います。「あの場面での発問は…」「あの机間指導は…」「あの時の板書は…」「グループ学習の時に…」誰かの授業を題材にしてより良い授業を求めて協議をすることこそが研究授業です。そうすることで参観した教師全員が勉強するものです。先生方、大変忙しいとは思いますが、是非ともそんなことも実現してほしいと思います。



2024. 6. 14. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『The busy day』

Busy と辞書で引くと次の5つの意味が出てきました。1 手がふさがっている、忙しい 2 にぎやか、人（車）が多い 3（電話が）話し中で（部屋が）使用中で 4（模様が）ごてごてした 5（人が）おせっかいな、差し出がましい

— 大修館『ジーニアス英和辞典』—

“busy”は多くの場合「忙しい」という意味で使われます。また、交通渋滞が起こっている様子も“busy”です。つまり、人や車、予定などが混雑している状態のことです。

6月9日（日）がまさにそんな日でした。この通信でもすでに取り上げましたが、台湾国立台南女子高校の生徒や先生方、関係者の皆様が本校にお越しになり、音楽交流会を行いました。

また、京都私学振興会賞の授賞式がありました。この賞は、前年度の京都の私立学校の様々な分野で顕著な活躍をした人や団体に贈られます。昨年度の全国中学校陸上競技愛媛大会において、4×100mRでの優勝が評価されました。また、前日とこの日、京都の私立学校フェアが開催されたのですが、その中で、来年度から高校の制服が変わることをPRするため、在校生たちがファッション・ショーを披露しました。特に、この日の総合司会は本校生徒が務めました。

私としてはどれも観に行きたかったのですが、学校で台南女子高校を迎えるイベントに残ることにしました。別々の日に実施されていれば、私だけでなくもっと多くの教職員がそれぞれの場面に参加し、生徒たちを応援することができたと思っています。当日は、私たち教職員も手分けしてそれぞれのイベントに参加したのですが、誰もがすべてを観たいと思っていたことは間違いありません。

生徒をそのような行事に参加させることには意味があります。“自尊感情”を高めることです。多くの人の前でパフォーマンスをして、それを評価してもらうことで自信がもてることは、既に本校の多くの生徒たちが知っています。だから、これらの諸行事に参加した生徒たちは、自ら参加を表明し積極的に取り組んでくれました。そして、期待通りにしっかりと自尊感情を高めてくれたと思っています。忙しい毎日を過ごしていると、『たまにはゆっくりしたい!』と思うこともありますが、忙しい毎日こそ充実感があり、それを終えた後に心の豊かさを感じることができると思うのです。



2024. 6. 10. (MON).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『交流の意味』

6月9日(日) 台南女子高等学校の生徒と教職員、仲を取りもってくださっている関係者の皆さんが本校に来られました。私たち大人も、そして生徒たちも徐々に緊張感がほぐれ、最後には右上の写真のような状況になりました。

今回は2017年度と同様に、本校と台南女子高校との音楽交流がメインとなっていますが、元々は音楽を通じた台南市と京都市との交流からスタートしたと聞いています。そこで今回もそうですが、台南女子高校の生徒と教職員の方々は、翌日には京都市長を表敬訪問もされました。

2017年の交流が縁で、本校と台南女子高校との間で姉妹校提携が結ばれ、昨年12月の研修旅行での訪問にも繋がっています。その時の“熱烈歓迎”ぶりは忘れることができません。コンサート会場の案内と整理のボランティアに参加してくれた高校3年生も同じ気持ちだったのでしょう。日曜日の午後からの本番で、お客様の入りが心配されましたが、在校生や保護者、地域の方のご協力もあって何とか客席を埋めることができました。

さて、交流の意味について考えました。この取組は単に一緒にイベントに取り組んで終わりではありません。私は冒頭のあいさつの中で次のように話しました。

I hope that your friendship will be the bridge over Taiwan and Japan .

生徒たちが出ていく社会は日に日にグローバル化しています。そのことが分かって勉強に励んでいる生徒もいます。いつかどこかでこの時の縁がもとで一緒に活動したり仕事をしたりする人がでてくるかもしれません。また、そのことが台湾と日本との懸け橋になってくれることを望むのです。参加された多くの方々から『感動した!』という評価を頂いています。この言葉はコンサートの感動に終わらず、その先の目標を感じてのものだと思うのです。9日の交流会を通じてそんなことを思っています。



2024. 6. 7. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『日台交流』

アジサイの花が盛りの時期を迎えようとしています。そういえば、朝の情報番組で、今年は例年に比べて梅雨入りが遅く、その結果梅雨そのものが短いのだそうです。今月の中旬以降に梅雨入りするとの予報でした。

梅雨と言えばアジサイの花を連想します。確かに梅雨の雨とアジサイの花、そこにカタツムリが乗っかっている様子には情緒がありますね。今年は今のところ雨が少なく気温が高くなるのも遅いように思いますが、アジサイの花は例年と同じように咲き始めました。花の開花には日光の量が大きく影響するらしいですが、気温・雨の量との関係性が気になります。

さて、台湾の台南女子高等学校との交流音楽会が明後日（9日）に迫ってきました。昨年12月の研修旅行で当校を訪問して以来、半年後には本校に迎えるということが頭から離れませんでした。あっという間に半年が過ぎたことになります。今日まで、あいだを取持ってくださっている“日台おこしやす実行委員会”の方とメールのやり取りを通じて内容を練ってきました。出演してくれる吹奏楽部・和太鼓部・箏曲部の顧問の先生とも細かな打ち合わせを重ねてきました。また、音楽会終了後に行う茶話会（交流会）を仕切ってくれる国際挑戦科の先生とも協議してきたので、“いよいよか！”という気持ちが強いです。

元々は学校と学校との交流だと思っていたのですが、在日台湾の要人の方々や京都市からのご来賓の方々がたくさん来られる大きな催しに発展しています。今では、台湾と日本との国同士の交流会と言っても過言ではない規模になりました。

10日は京都市長への表敬訪問、11日には本校の伝統文化授業の体験もされます。

明後日と11日、向こうの生徒たちや先生方をどんな風に歓迎するのかについても随分と話し合ってきました。全校集会を開いてセレモニーをすることも考えましたが、今回は日常の学校生活に参加してもらおうということに落ち着きました。しかし、大事にすべきは気持ちです。半年前、現・高校3年生たちが向こうの学校を訪れた際にはそれぞれ中国風の『熱烈歓迎』を受けました。今度はこちらの番です。こちらは京都人らしく『おもてなしの心』をもって迎えたいと思います。

全校生徒の皆さん、そして保護者の皆様、何かとご都合はあろうかと思いますが、明後日の発表会には是非ご参加いただき、台南女子高校の生徒と本校生徒との交流の場面をご覧にいらして下さい。生徒たちは、きっと一生の思い出をつくると思います。



2024. 6. 4. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『ドラマティック』

先週末は各競技で高校のインターハイ予選大会が行われました。部活動を頑張ってきた生徒にとっては最も大切な大会です。陸上では100mH と7種競技で見事に優勝。京都府 No.1 となって近畿大会進出です。惜しくも2位となった5000m 競歩、5位入賞を果たした同じく5000m 競歩の選手も15・16日の近畿大会へとむことができました。

100mH 走では1年生が決勝にまで進み、『近畿大会出場か！？』というところまで来ていたのに最後のハードルに足をかけて転倒。ゴール後に、優勝した3年生が涙にくれるその選手に声を掛けたシーンがとても印象的でした。まだ1年生です。この悔しさをバネに大きく強く成長してくれることを念じています。

ソフトテニスでは個人戦で、全国へ行ける8ペアの内7ペアを本校の選手が独占しました。惜しくも負けたペアも“あと少し”というところまで行っただけに残念でなりません。まじめに一生懸命練習してきた選手だけに全国の舞台を経験させてあげたかったです。月曜日の朝、そのペアだけが練習していたのが堪らなかったです。

翌日の団体戦では、決勝戦までは順調に勝ち上がったものの、その大一番はなかなかしんどかったです。相手は昨年度と同じ。『今年こそは！』と闘志むき出しで向かってきました。試合は3チームの点取り戦。本校の1番は前日の優勝ペアです。相手は予想外に早く負けており、その悔しさと反省をこの試合にぶつけてきました。“負けて元々の強気の攻撃テニス”はやりにくいものです。守りに入ろうものなら一気に押し切られます。何とか凌ぐものの、じりじりと追い詰められて負けてしまいました。大きなアドバンテージを相手に与えてしまったことになります。2番目に出場したペアが頑張りました。常に団体戦のメンバーではない選手が監督の大抜擢に見事に応えました。私が選ぶならこの選手に MVP を与えたいと思います。3番手勝負は、これも相手が強気で攻撃してきます。しかし、このペアは決して受け身にならず同じように攻撃し続けました。一進一退の好ゲームですが、観ている方はハラハラ・ドキドキの連続でした。たくさんの、本当にたくさんの応援の力もあって勝ち切ることができました。陸上とソフトテニス、本気で頑張る姿は美しいと改めて感じたところです。

月曜日の朝、バレー部の選手に出会いました。「試合どうやった？」「橘高校、凄かったです。」よりによって、京都府で一番強い学校と戦った彼女は清々しい態度でそう答えました。勝っても負けても心身が成長するものですね。みんな、お疲れ様でした。



2024. 5. 24. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『海外留学』

昨（23）日、留学説明会を行いました。主に国際挑戦科の生徒を対象にしたものですが、それ以外のコースの生徒も少なからず参加していました。本校では、高等学校在籍中に留学することを推奨しており、特に国際挑戦科では3か月・6か月・1年と、長期の留学も可能なカリキュラムになっています。方面はニュージーランドとカナダ。どちらも世界の治安がよい国の中でもトップレベルにあり、女の子の留学先としては安心できる国です。



2つのエージェント会社の方がそれぞれの留学先や向こうでの学びについてプレゼンされました。その内容は実に魅力的で、私も聴いていて『行ってみたい！』と感じましたし、親の立場になれば『行かせてみたい！』と思ったところです。

実は、今も国際挑戦科の2年生の中にはこの両方の国で学んでいる生徒がいます。また、3年生は既にそのプログラムを終えて帰国してもいます。プレゼンの中で、3年生が当地へ行って2か月余りたった頃のインタビューが流されましたが、一様に『初めは苦労けれど今は楽しく過ごしている。絶対に来てよかった。』と答えていました。

ところで、私には2人の息子がいます。上の息子は公立中学校で国語の教師をしています。下の息子は現在タイのバンコクで働いています。その下の息子が今から8年ほど前のこと、「1年間、大学を休学して留学をさせてほしい」と言い出しました。

昨日もそんな話がされていましたが、彼が言うには、「これからは日本の中だけで働く時代ではなくなる。今後、日本企業は市場を求めてどんどん海外に進出していくことになるからそれに応じて日本人はもっと海外で働く必要が出てくる。英語力を身に付けることと海外で生活することを通して生きた勉強をさせてほしい。」というのです。

息子たちは自宅から大学に通っていたので一人暮らしの経験はありません。妻は心配と寂しさで戸惑っていましたが、本人の思いと決意は固く、応援することに決めました。まず驚いたのは費用です。『留学にはこんなにお金がかかるのか！』とビックリしたことを思い出します。それでも何とか工面して1年間ロス・アンジェルスに行かせました。通信機器の発達もあって頻繁に連絡を取ることもでき、思っていた不安はどんどんなくなっていました。大学卒業と同時に海外に支社をもつ企業に就職を果たし、海外勤務を希望し続けてきた彼にやがてそのチャンスが巡ってきました。20歳代でマネージャーとして現地の人の上司となって頑張っています。因みに、タイではある程度裕福で優秀な人は、日本の企業に就職するために英語を勉強するそうです。

生徒の皆さんには、自身の可能性を思いっきり伸ばして欲しいと思います。息子の経験からも、生徒の皆さんには絶対にこの機会を活かして留学をしてほしいと思います。ただ、昨日も言うておられましたが、光華の皆さんはラッキーです。高い留学費用を出して行かせてもらえることに対する感謝の気持ちは決して忘れないでください。

2024. 5. 17. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『おもてなしの心』

今週は多くのお客様をお迎えし、学校全体でよい緊張感をもって対応することができました。

14日(火)には京都市内を中心とした中学校の進路指導主事の先生方、15日(水)には京都市内を中心とした学習塾の先生方、そして16日(木)は中国北京市周辺の高校の校長先生方です。

14日と15日の学校説明会の目的は、教育内容を中心に本校の実態を詳しく知って頂き、『この学校なら安心して生徒を送れる』と思ってもらうことです。

北京市近郊の高校の先生方に対して

16日は、京都光華女子大学がご来校頂いた高校の卒業生を留学生として受け入れるねらいがあり、その際に本校とも友好関係を結ぼうということで実現しました。

お客様をお迎えするにあたって、私の役割は最初のあいさつです。冒頭の校長のあいさつで、その学校の雰囲気や考えを大体知ることができるということは、立場が反対の場合に経験して理解しているだけに重責を感じながら行いました。

昨年度を上回る中学校と学習塾の先生方が来られ、私の話に真剣に耳を傾けてくださいました。このエッセイの中で校長の思いや考えを生徒や保護者の方に伝えていることを話したり、毎日撮り続けて“アット・KOKA”にアップしている写真の中から最新のものを紹介しながら学校の雰囲気を感じたりしてもらいました。最後に、『預かった生徒たちを大切にする』ということを強調もしましたつもりです。

参加された方々にアンケートを記入してもらいました。最後に「京都光華をどのような学校だと感じておられるか」という設問を設けてあります。

○面倒見がよい ○生徒に丁寧に寄り添ってくださる ○安心して生徒を送れる

○大学への内部進学があって進路保障の面でも安心 ○生徒の力を伸ばしてくれる

○落ち着いた学校 ○礼儀・マナー教育が特徴的 ○スポーツにも力を入れている

頂いた回答をみると、概ね私たちが大切にしてきた内容が書かれており、進路指導をされる方々に本校教育の思いが伝わっていることが感じられて嬉しく安心しました。

16日の北京周辺の高校の校長先生方も、本校教育の内容や授業中の生徒の様子を見られてたいへん感心されたようです。中には自分の娘を通わせたいからと「学費は幾らかかるのか」と具体的な質問をされる方もおられたほどです。“very cheap”という言葉が飛び出し驚きもしました。中国、特に北京近郊の私立高校に通うためにかかる費用がどのくらいか知りませんが、おそらくそれと比較され、更にうちの生徒の学ぶ様子から判断されての言葉だったのだと解釈しています。

それぞれのお客様への対応で、教職員が特に大切にしていたのが「おもてなしの心」です。また、そのことは生徒にも伝えていきます。笑顔で明るく挨拶をする生徒に触れて、私たちの説明が証明されたのだとも思っています。皆さん、お疲れ様でした。



2024. 5. 11. (SAT).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『自分で考えて行動すること』

一昨日、小中高合同で避難訓練を実施しました。想定したのは地震です。我が国は世界でも有数の地震多発国で、残念ながら何年かに一度は死者を伴う大地震が発生しています。ここ京都市南部には“花折断層”が通っており、それが動いて大地震が起こる可能性は少なくありません。現に今朝も小さな地震ですが発生しました。だからこそ常に備えを徹底しておく必要があります。そこで、避難訓練などの行事の際にそのことを真剣に考えさせる機会を設けています。一昨日の講評では、次の5つのことを強調し、訓練後の学活（HR）でも担任の先生とその内容を深めてほしいと伝えました。

- 1 先生の指示に従う 2 騒がない・慌てない
- 3 小さい子を優先する 4 避難者を支援する 5 家族と話をする

本校敷地には小学1年生から高校3年生までが生活しています。中学生と高校生には小さな子どもたちに心を配り、何ごとも優先させてほしいと伝えました。また、不幸にも被災した場合に学校は地域の避難所になり、多くの地域住民が来られます。その際には教職員と一緒に避難者の支援に手を貸してほしいことを強調もしました。阪神淡路大震災や東日本大震災の時に学校が避難所になった際、中学生や高校生が大活躍をしてくれて大いに頼りになったということを友人から聞いたこともあります。

人は危機的な状況に置かれたとき、その人間性が現れるものです。「自分だけ・我先に！」と行動するのではなく、常に周りの状況を冷静に見て、「全体の中の一人」として最善の行動がとれるようにしてほしいと思います。

また、今日は「授業体験会」と題して入試イベントを実施しました。中学校入試では英語活動と華道体験を、高校入試では華道体験をしてもらったところですが、参加して下さった保護者の皆様や小中学生は、イベントを盛り上げようと活躍する本校生徒の姿に感心されているようでした。

ピンクのポロシャツに身を包んだ“フラワーズ”の生徒たちの他に、私のあいさつの場面には中学ソフトテニス部と高校スキー部のキャプテンを連れ出しました。汗をかいた練習着姿の生徒が現れて参加者の皆さんは驚かれたことだと思います。彼女らは、今朝突然依頼されたにもかかわらず、見事に私の質問や指示に従って本校をPRするコメントをしてくれました。“フラワーズ”の生徒たちや2人のキャプテンが、自分で考えて生き生きと行動し発言する生の姿は、本校の様子を知ってもらう上で、教師のどんな説明よりも説得力があったと思います。

すべての生徒が、京都光華のために自分のすべきことを考えて行動してくれることが、本校をより良い方向へ導いていく最善の方法であると改めて感じたところです。



2024. 5. 7. (TUE).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『輝く姿』

GW が終わりました。そして、今年もまたたくさんの試合の応援に行きました。それぞれの試合で、学校で見せるのとは異なる生徒の姿に触れ、教師としての喜びを感じたところです。現在のところ、中学生の体育系の部というと、右の写真の通りバドミントン部と陸上部とソフトテニス部があります。

(※スキーはこの時期には試合がありません。)

バドミントンの試合では、勝てない相手ではないとは思ったのですが、上手くリズムが合わず相手のペースで試合が進行。ミスも重なって惜しくもセットカウント1-2で敗れました。

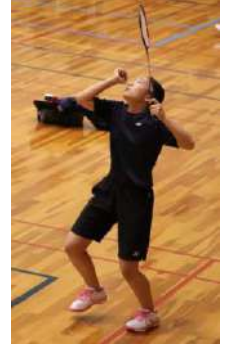
陸上競技では、100m・200m・100mH・1500m・走り幅跳び・4×100mRでそれぞれ優勝、800m・円盤投げで準優勝と、今年もまた圧倒的な力を発揮して総合優勝を果たしました。

怪我で長く練習を休んでいた選手が本番で久しぶりに全力疾走しました。周囲の心配をよそに見事にカムバックを果たしての優勝です。また、予選で不本意な成績で決勝に臨んだ選手が1位でゴールテープを切ることもできました。これらの結果の背景にはそれぞれのドラマがあることが想像できます。そのことが感動を覚えさせます。選手たちはまだ15歳以下ですが、よく自分自身を見つめ、心身が鍛えられ、必要に応じて気持ちを切り替えて試合に臨んでいます。本当に凄いことですし見事です。

団体は、2位が26点、3位・4位が23点のところ、何と68点を獲得しての優勝でした。上の写真は総合優勝を果たした際の表彰の様子です。

ソフトテニスは、3年生が全国大会の前哨戦に出場するため石川県へ遠征をしていた関係で、5日の準決勝と決勝は1・2年生で戦うこととなりました。それでも皆が力を発揮して危なげない優勝を果たしました。3日に行われた個人戦では、ベスト8は本校選手が独占。その後の試合で上級生が下級生に敗れるという波乱も起こりましたが、どの試合も見事な戦いぶりでした。私も経験がありますが、下級生が勢いをもって向かってくると、精神的な重圧がかかって案外やりにくいものです。最終的に第1シードの3年生が優勝を果たしましたが、準優勝に輝いたのは本校の1年生ペアでした。私がお会場に着くなり、目に涙を一杯にためて試合結果の報告に来てくれた3年生ペアがいました。1年生に負けた悔しさが全身から感じられました。また、学校に帰って解散になるや否や、3年の2人がコートでボールを打ち始めました。

次の公式戦は全国へつながる夏の大会です。今回の反省を活かして、今日から頑張って練習してほしいです。そのことを通じて心身を鍛えてほしいと願っています。



2024. 4. 25. (THU).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『2つの花まつり』

桜の木がすっかり緑色に替わりました。一方、道路沿いのハナミツキが美しく色づいています。また視線を下げると、ツツジやサツキが咲き始めてもいます。春は彩りが鮮やかで私たちの目を楽しませてくれますね。

さて、今春は2つの「花まつり」を経験しました。「学園花まつり」と「仏青連花まつり」です。後者については後ほど詳しく述べることにします。「花まつり」はお釈迦様の誕生をお祝いする仏教行事です。そういえば、幼い頃、私の生まれ育った地域でもこの行事がありました。意味も分からず、春の温かさの中でワクワクしながら友達とお釈迦様に甘茶をかけていたのを思い出します。

「学園花まつり」は19日（金）に行われました。今年も素晴らしい天候に恵まれて盛大に催されました。会場は生徒が持ち寄った色とりどりの花にあふれ、楽しい雰囲気の中で進行しました。大学校地のテニスコートに園児から高校生までが集まります。大学の授業も休講で、多くの大学生や関係者の方が周りで観ておられました。

開会に先立って小学生と中高生の吹奏楽団を先頭にパレードが進みます。中高生のバトントワリングはひと際参加者の目を引きます。中高の聖歌隊の美しい歌声が会場に響きます。そのような中、代表生徒による献灯・献花、散華（さんげ）、灌仏（かんぶつ）と行事は進行します。最後まで明るく華やかな雰囲気は続き、中学生高校生たちも十分に楽しんだことだと思います。

今日25日（木）には「仏青連の花まつり」が行われました。仏青連とは、正式には「京都府中学高等学校仏教青年会連盟」と言い、京都府内にある仏教系の12の私立学校によって組織されています。宗派こそ異なりますが、仏様の教えに思いを寄せつつ自らの生き方を見つめ直すとともに、各校が刺激し合いながら連携する機会です。輪番制で当番校が決まり年に3回（花まつり・成道会・涅槃会）の行事を行います。今年度は本校が当番校です。当番校には他のすべての学校の代表生徒が集まります。

会場が光風館の講堂ということもあり、「学園花まつり」とは違って厳粛な雰囲気の中で進行しました。本校の全校生徒による集会のあり様を他校の人たちに知ってもらふ絶好の機会であったとも思います。司会・献灯・献花・焼香・散華・灌仏、そして合唱、更に会を盛り上げてくれた吹奏楽部と、代表生徒たちも本当によく頑張ってくれました。客席の参加者も含めて全員が素晴らしい態度で臨みました。参加した他校生たちは『ここまでやるかっ！』と驚いたことだろうと思います。

2つの「花まつり」を通じて、改めて宗教行事の大切さに気付いた思いです。これらの行事の中で、生徒たちは確実に自分を見つめ、心を豊かにしています。



2024. 4. 17. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『順調な滑り出し』

私事から書き始めることをご容赦ください。実は昨晚、我が家に新しい命を授かりました。二世帯住宅で暮らす息子夫婦のもとに長女の誕生です。私には2人の息子がおりますが、女の子は初めてです。あっいや、檸檬ちゃん(愛犬です)ごめんね。大切な姫の貴女のことを忘れていたわけではありません。ただ、既に12歳を越えて人間の年齢としては私を越してしまったかもしれませんので…(笑)。

午後9時を過ぎた頃、妻と病院に行きました。保育器に入った赤ちゃんをガラス越しに見るものと思っていたのですが、何と触れる状態で初対面をしました。小さな命は、一生懸命に泣き、お母さんのおっぱいを探しているのか首を左右に動かしています。まだ目も開きませんが初孫の誕生を心から嬉しく思います。初めて父親になったときと初めておじいちゃんになった今では少し気持ちが異なりますが、どうか元気にスクスクと育ってほしいと昨晚からそればかりを願っています。

さて、本校生徒たちの令和6年度のスタートはというと、概ね順調です。毎朝校門で生徒を迎えていますが、中高新1年生とのやり取りが何とも新鮮です。中には内部進学した人もいますが、それでもそれぞれ中高の新しい制服に身を包んでいるだけでワンステップ上での生活に成ったんだと思えるのが不思議です。

今朝は、こんなことがありました。警備員さんと話をしていると「すみません！」と声をかけられました。「今日初めて自転車で来たんですけど、何処にとめればいいですか?」「このまま真っ直ぐに進んでいくと地下の駐輪場へ入るスロープがあって…」とそこまで言ったときに自転車を押した3年生が通りました。「この先輩に付いていったらいいよ。」と内容を改めました。心の中で3年生に対して『宜しく頼むね!』と念じながら。また、職員朝礼が始まる時間が迫ってきたので、校舎に入ろうとした時です。2人の中学新入生が私の前に止まり、照れくさそうに聞き取れないくらいの声で言いました。「あの一、保健室は何処ですか」「よっしゃ、ついて来て!一緒に行こう!」こんな何でもない会話ですが、それをとても新鮮で楽しく感じています。

授業を観て回るのを日課にしています。授業が始まって約1週間、授業を受けているどの姿も穏やかで落ち着いています。内部進学生と外部生が交じり合った新しいメンバーでの学級には独特の緊張感もあるようです。また、互いのことを知り合っている中高2・3年生にしても、新しい先生との出会いがあります。今後、生徒たちも先生の方も徐々にお互いのことを理解し合い、心の距離を詰めていくのだらうと思いつつ授業の様子を見ていると何とも言えずワクワクした気持ちになります。

今の新鮮な気持ちを忘れず1年間を過ごしてほしいと思います。新しい命のために私のできることを考えながら、目の前の生徒に対してできることを考え続けます。



2024. 4. 10. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『R6のスタート』

8日に始業式、9日には入学式を行って令和6年度が正式にスタートしました。手前味噌で恐縮ですが、教職員の協力と生徒の頑張りのお蔭でどちらの式もとてもよかったと思っています。始業式と入学式の様子をここに記録しておきます。

これら2つの式で生徒に提示したのが今年度のキャッチフレーズです。これについては、年度初めの職員会議で既に教職員とは共有しています。

“Ask what you can do for the KOKA!”で、「あなたが光華のためにできることを考えましょう。」と訳しました。

入学式では、中学1年生が対象になっているため理解が難しいだろうと思って“For the KOKA!”とだけ示しました。

このフレーズは第35代アメリカ合衆国大統領のジョン・F・ケネディーの就任演説から引用しました。大学受験を目指して勉強していたときにその文章に触れ、17～18歳の私は感動と衝撃を受けたことを覚えています。該当の部分を以下に示します。

“My fellow Americans, ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country. My fellow citizens of the world, ask not what America will do for you, but what together we can do for the freedom of man.” 日本語訳はこうです。「我が同胞たるアメリカ国民よ。この国があなたに何をしてくれるのかではなく、あなたがこの国のために何ができるのかを問うてほしい。我が同胞たる世界の市民たちよ。アメリカがあなたのために何をしてくれるのではなく、共に人類の自由のために何ができるかを問おうではないか。」

2・3年生が対象の始業式では次のことも強調しました。目標を設定しそれに向けて努力をしてほしいと言った後です。目標が達成できなかったときに、その原因を厳しく自分へ向けてほしいということです。人はうまくいかなかったときや上手くいかないときにその原因を周りの人や環境に求めがちです。それではダメだと言いました。

「何が悪かったのか!？」その原因を自分の中に求め、謙虚に反省して次に生かせる人が伸びていくのだと強く訴えもしました。

始業式では上の写真の通り、私の話を聞いた生徒たちの多くが自分の今年度の目標を発表しに登壇してきました。仮にうまくいなくても構いません。それに向かって精一杯の努力をすれば、それは必ずその人のそして京都光華のためになるのだと思うのです。さあ、焦らず慌てず、じっくりと定めた目標に向かって動き出しましょう。



2024. 4. 5. (FRI).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『今年はどんな年に…』

今年は3月の気温が低く、おかげで校門の桜は今が見頃となっています。来週早々に始業式と入学式とを迎えることになるので、どうやら今年は桜の花が満開の新年度始まりとなりそうです。

そのような中、四月になって以来毎日、全教職員は新年度の準備を進めています。初めて学級担任をする教員もいれば、まったく新しい仕事に携わることになる者もいて、教職員の方も“ドキドキ”と“ワクワク”の両方の気持ちをもって行動しているはずです。

さて、私はというと、何も分からず赴任した昨年度とはかなり気持ちが異なります。

久しぶりに学校の最前線に戻ってきた昨年度は、断然“ワクワク”感が“ドキドキ”感に勝っていました。しかし、今年度の気持ちはすこし違っているのです。一年間を過ごしてみて、本校の課題を「我がこと」として感じているからです。もちろん、課題のない社会などありません。それを一つひとつ解決しながら進んでいくのが社会であり組織です。もちろん学校もそうです。一人の生徒が背負わされている課題、本校生徒全体に共通する課題、また今学校が直面している課題もあって、どれもこれも、とても簡単に解決できるものではなさそうです。新たな年度を迎えるにあたって、一つひとつに丁寧に向き合い、解決していこうと決意を新たにしているところです。

こういったことはこれまでも経験したことがありました。その際、その状況をどのようにして抜け出してきたかを思い返してみるといつも同じ解決方法をとってきたことに気づきます。ここは学校です。生徒がいます。ですから生徒の抱える課題の解決が最優先です。生徒一人ひとりが本校の課題を作っています。だから目の前の一人の生徒の課題解決に目を向け、教職員が力を結集して取り組むのです。そうすると、いつの間にか不思議と他の課題までが次々と解決するということが幾度も経験しました。

今回のエッセイのテーマを『今年はどんな年になるのか』としようとしたが考え直しました。それでは先月の修了式に全校生徒と全教職員とで確認した“上向き、前向きの考え方・生き方”に反するからです。そうすると、テーマを次のように改めるべきであると気づきました。『今年はどんな年にしようか』です。

昨年度赴任した時にどんな時も「この子らと共に」過ごそうと決めました。新しく入学してくる123人の生徒を含め、新しい京都光華中学校高等学校がスタートします。ほとんどの生徒たちは新年度に対して“不安”よりも圧倒的に“期待”をしているはずです。多くの学校の中から本校を選んで進学して来てくれた生徒たちに丁寧に向き合い、その子たちの個性と能力を大切に、それを十分に引き出し伸ばします。

目の前の生徒を徹底的に大切にすること、それが本校の信条です。そうして、生徒のキラキラと輝く姿を見ることが私たちの喜びです。令和6年度も頑張りましょう。



※カナダの高校生との交流会より